

## 書評・紹介

吉津宜英著

### 華嚴禪の思想史的研究

#### 一 色 順 心

本書は、宗密によって確立された華嚴禪を研究対象とし、華嚴禪の形成に至る中国仏教を思想史的に解明した労作である。標題において示された「華嚴禪」という言葉は、一見耳慣れぬ言葉であるが、著者自身が本書の「序」で説明されているように、古来誰かがそれを自称しているのではない。中国仏教において成立した二つの宗派である華嚴宗と禪宗とに跨がる研究領域を研究対象とするとき、宗密の思想においては、華嚴と禪といった二項目分離の発想では把握できぬ新しい立場が成立した。それを著者は「華嚴禪」として設定したのである。これまでに華嚴と禪との間の問題を取り扱った研究成果には、その代表的なものとして高峯了州博士の『華嚴と禪との通路』（南都仏教研究会、昭和三年十二月）がある。その刊行以後、今日に至るまで華嚴と禪との両分野に関する研究は、遂行され、多数の研究論文や研究書が公けになっている。たとえば、華嚴の面からいえば、中国禪の影響を受けている澄観や宗密などの諸師に関する

る思想史的方法による書物が出版された。そのような経過の中で、吉津宜英氏の仏教研究は、中国華嚴および朝鮮華嚴を中心とした数多くの研究論文として発表され、その斬新かつ綿密なる研究に対して高い評価が与えられていることは周知のごとくである。このたび吉津氏が世に問われた『華嚴禪の思想史的研究』は、「學術叢書華嚴仏教」シリーズの一冊として出版されたものである。多方面にわたる長年の研究蓄積をふまえてつづそれを掘り下げることを通してまとめられたものであり、本書の随所に著者自身の深い問題意識を窺うことができるのである。本書の内容は、華嚴宗の成立をどこにみるかという問題を基点として華嚴宗および禪宗の諸師の思想動向を有機的に把握しつつ、華嚴禪の確立に至る宗密の仏教の思想的必然性が明らかにされている。その場合、とくに教判と成仏論とに焦点があてられているところに本書の一貫性をみることができる。また、中国仏教の諸師の思想および華嚴と禪との二宗を考察するにあたって、「教」と「宗」という基本的視点によって所論が展開しているのである。教禪一致と呼びならわされてきた宗密の仏教は、実は本来成仏を内容とする華嚴禪の確立にあったのであり、「教でも禪でもない」第三の立場を確立した人として明証されている。また、宗密の華嚴禪に先行する智儼・義湘・法蔵・慧苑・李通玄・澄観などの諸師の思想に関しても、新たな問題点が指摘されている。本書が公刊の運びとなったことによって、華嚴や禪の研究者のみならず幅広い分野の研究者にも裨益するであろうこと間違いない。それとともに、本書が思想史的研究で

あることは著者自身が「序」の中で記すところであるが、研究者自身の研究姿勢とその方法についても教えられるところ少なくないのである。

本書の構成は、六章で成り立っている。その記述内容を知ろうに必要なる項目を略示すれば次のとおりである。

## 序

### 第一章 華嚴教学の成立

### 第二章 法蔵教学の変容

### 第三章 達摩禪宗の成立と発達

### 第四章 澄観の華嚴教学と禪宗

### 第五章 宗密における華嚴禪の成立

### 第六章 華嚴禪の系譜

上記の章題のもとに、第六章のみは節目を立てないが、前五章の各々がいくつかの節に分かれている。なお本書の末尾には、索引と英文目次・英文要旨が付されている。

## 二

以上のような項目の順序にしたがって、本書の内容を簡約して紹介することとしたい。本書の標題が指示する華嚴禪は第五章と第六章において論述されているが、まずそれ以前の四章すなわち宗密以前の華嚴と禪を取り上げた箇所の内容紹介からはじめることとする。

第一章「華嚴教学の成立」は、主に法蔵の華嚴教学を中心に論述されている。本章は五節に分かれ、一三五頁分にも及ぶも

のである。すなわち、法蔵の教学の形成と、その中核をなすと考えられる法界縁起説、および成仏論の詳説、そして成仏論の付論としての縁起相由と法性融通の構造を明すものである。最初に序説として智儼の教判論が明らかにされる。華嚴宗がいつ成立したのかは確定しがたい問題であるが、著者は、華嚴教学の成立形態を誰の教学に見出すのかという問題を、教判論の立場から考察する。智儼の教判論の場合、最初期の著作である『搜玄記』から、晩年の著作に至るまで終始一貫して漸頓円の三教判を守っている。しかも智儼は、『華嚴経』を頓と円との二教に関わるものと規定する。この規定は新羅の義湘においても継承されている。著者は、法蔵の教学を形成している多くの要素が師の智儼に拠ることを認めながらも、法蔵が『華嚴経』を頓教から切り離し『華嚴経』を円教のみにして、別教一乗と規定した一点において、華嚴教学の成立をみたいとする。つまりその成立を『五教章』における五教判の確立において認定すると述べる（第一節）。これをうけて『五教章』に説かれる五教判の内容を検討する。五教の第五円教を別教一乗のみに限定し、同教一乗をそこから排除する法蔵と、同教一乗が円教に内在するとみなす智儼とは決定的な違いがある。また何故に法蔵は同教一乗と第五円教との間に「けじめ」をつけるのか。そこには三論・法相・天台などの先行する諸教学への批判と、反撥の意識が感取される。中でもその最大の理由として玄奘門下の基の活躍とその教学形成に対する法蔵なりの批判があった。基の三時教や八宗に刺激されて法蔵の五教判が確立したのではないか

と推論する(第二節)。次に十宗判と四宗判についても検討が加えられる。基の第八応理円実宗つまり唯識学が法蔵の十宗のどのどこに位置づけられたかといえ、十宗が基の八宗に拠って形成されたものでありながらも、唯識学はその中のどこにも相当させることはできず、所在不明のままであった。これに對して、玄奘所伝の仏教が「唯識法相宗」と呼称され、四宗判の第三宗に位置づけられたことによって、結果としては十宗における不備が解消されることとなった。著者は、四宗判そのものの性格は、あくまで『起信論』などの教理を、如来蔵を宗とするものと規定し、その立場から空仏教や唯識大乘を批判するための教判であること、したがって五教判や十宗判のように第五円教なり、第十円明具德宗の華嚴別教一乘を主張するための教判ではないと指摘する(第三節)。次に、法蔵の法界縁起説が『五教章』や『探玄記』を手がかりとして明らかにされる。その場合に、智儼の縁起説との関係において法蔵の法界縁起の性格が浮彫にされている。つまり法界縁起説は、名称としては地論や智儼の著作に出ているものである。しかしそれらは仏性縁起あるいは一乘縁起、さらには単に縁起と称するだけでも十分であるような性格であった。それに対して法蔵においては「法界縁起」という呼称そのものがまず重要である。しかも法蔵の法界縁起は、五教判の第五円教の義理として、同教一乘を媒介とし、一切の教法の基盤となるものとして規定されている。つまり別教一乘の縁起として限定される縁起説なのである(第四節)。次に「法界縁起の成仏論」という節目のもとに、(一)智儼の成仏論

(二)義湘の成仏論(三)法蔵の成仏論という三項目に分けて各々の成仏論を検討する。智儼・義湘の思想的影響をうけつつ、法蔵においては、後の『華嚴經旨帰』『探玄記』などの著作の中に、信滿成仏とは別の、第五円教独自の成仏論といえる「旧来成仏」が説かれていることが解明されている(第五節)。前節をうけて、法界縁起の構造をなす縁起相由と法性融通について述べる。法蔵の『華嚴經旨帰』『五教章』『探玄記』『遊心法界記』の所説を手がかりとして検討する。法蔵の法界縁起の構造は、縁起相由から法性融通へという方向をもつ。縁起相由は『五教章』のいわば縁起に関わる一切の議論の総括であったが、『華嚴經旨帰』に説かれる法性融通の議論に関しては『五教章』の中からはそれを跡づけることはできない。むしろ現存の文献の中では杜順の『法界観門』をその背景に予想しようと述べられるが、重要な指摘であると思われる(第六節)。

第二章「法蔵教学の変容」では、法蔵の弟子の静法寺慧苑の教学と、法蔵教学の影響のもとにあつて法蔵とは異類の思想を、表明した李通玄の思想が究明される。慧苑・李通玄の教学には、教判と教理の両面にわたつて法蔵の教学との異なりがある。法蔵との対比をするとともに、慧苑・李通玄の教学における独自の發揮の面についても明らかにされる。慧苑のたてた教判は四教であるが、その教判の性格は、法蔵の五教判・十宗判・四宗判の三者を総合した教判であること、また、十玄説を徳相の十玄と業用の十玄とに分けたことで法蔵の十玄説からはかなり変容していること、慧苑の成仏論は法性融通一元の立場での成

仏論であって法蔵の縁起相由・法性融通の二元の立場とは異なりがあることが指摘される(第一節)。李通玄の『新華嚴經論』の玄談部分に十教判があげられている。その内容を見ると法蔵の五教判を指南としていること、また法蔵の五教判では『華嚴經』を別教一乗のみと限定してその至上性を示しているが、李通玄の十教判での『華嚴經』の位置づけにはいわば同教一乗の立場が出ていることが明らかにされる。また、李通玄の成仏説が検討され、彼の成仏説には、法蔵に至るまでの信満成仏あるいは三生成仏を意識し、それらを超克し、実践的に徹底化しようという意図をもっていることが示されている(第二節)。

第三章「達摩禪宗の成立と発達」では、達摩禪宗の成立(第一節)と、八世紀から九世紀にかけての達摩禪宗の様相(第二節)が示される。著者は、禪宗の成立がまさに「宗」という文字に象徴される立場によることを述べ、禪宗の列祖に加えられる人々には「宗」の立場があり、また、列祖になる以外の習禪者はだいたい「教」の立場に居たのであろうと考える。

「教」に対する「宗」という図式で、中国仏教における禪宗の成立の意義が捉えられているのである。このような観点からすれば、すでに達摩の語録である『二入四行論』において「禪宗」は十二分に成立していると指摘する。

第四章「澄観の華嚴教学と禪宗」では、澄観が華嚴の法灯にある学匠でありつつ、禪宗隆盛の世でどのような教学を打ち立てていったのかを、華嚴教学と禪宗との関連に問題をしばって考察する。本章は五節に分かれ、前四節において詳細な検討が

なされ、そのまとめが第五節である。まず、教判と宗趣の面から論ぜられる。すなわち、『華嚴經疏』『演義鈔』『行願品疏』の三つの著作に表われる教判と宗趣を取りあげて、そこにおける禪宗への対応が論究されている。本節末尾の著者のまとめによれば次の三点となる。(一)五教の第四頓教に禪宗を配したのは禪宗を「教」で裏づける方向性と、その内容が第五円教の『華嚴經』の至上性には及ばないという批判とを共に含んでいる。

(二)教判の異説から「宗」に関わるものを除き、十宗を宗趣へ移したのは、宗は本来「教の宗」としてこそ考えるべきだという主張と、「教に依らない宗」を立てる禪宗への批判を含む。(三)「法性宗」「無相宗」あるいは「法相宗」などの用例は、「教の宗」という大前提をふまえれば、禪宗のような独断と偏見の危険性を犯さないで「宗」の立場を示しようというのである(第一節)。次に四法界説が問題とされる。澄観は事法界・理法界・理事無礙法界・事事無礙法界の四法界説を形成した。それは、慧苑の教説に対する批判を背景とし、法蔵の法界縁起説を復活させ、それと『法界観門』の内容とを全面的に結びつけることによって形成された。前節の教判と宗趣の中で、「宗」は本来「教の宗」としてあるべきであることが主張されたが、澄観は宗に対する教の優位性を「義」によって根拠づけ、「義」の世界を四法界として形成したと述べられている(第二節)。澄観の成仏論は、事事無礙法界の成仏論であることを解明する。そのことは『八十華嚴經』『如来出現品第三十七』の一文の解釈をめぐっての問題であり、詳細に検討される。第一章第五節にみら

れた法蔵の成仏論は、信満成仏と旧来成仏という二つの形態において捉えられた。その中の旧来成仏に関しては『華嚴經』「性起品」の一文に拠って、しかも法界縁起説が援用されたものであった。旧訳・新訳の違いはあるものの、同一箇所の經文を澄観も解釈したといえる。その註釈である『演義鈔』の中において事事無礙法界の成仏論が展開されている。著者は、成仏論に関する法蔵と澄観の相違を明確にし、澄観における事事無礙法界の成仏論は、性を以て相を融する「性起」を内容とするものであることを明らかにしている(第三節)。澄観の著作には般若三蔵記出の『四十卷華嚴經』の註釈である『行願品疏』があり、『華嚴經疏』や『演義鈔』より後に撰述された。この『行願品疏』の中の第五門「修証淺深」は、宗密の『円覚大疏』「修証階差」に大きな影響を与えているという。まず最初に両者の対照テキストが漢文体のまま掲げられ、両テキストの中の符合する箇所が示される。次に「修証淺深」の全部分の国訳が提示され、そこにみられる澄観の禪宗観について説明される。当時の禪宗の隆盛に対処するとともに彼自身の華嚴教学の中にこれをいかに取り込んでいくかという意図をもって「修証淺深」が書かれた。澄観が「修証淺深」の中で禪宗の頓を取り扱い、また禪宗における機の自覚を論じたことは、彼自身の華嚴の法門への悟入においても機の自覚を深めることになった(第四節)。

### 三

第五章「宗密における華嚴禪の成立」では、宗密の教学が華

嚴禪とも呼ぶべき教学の建立にあり、その内容が徹底した本来成仏であることが解明される。本書の眼目であるこの章は、(一)教判と『円覚經』、(二)本来成仏論、(三)禪源と頓悟、(四)荷沢宗の主張、(五)原人と帰一の五節に分けて説かれている。宗密の教判論には法蔵や澄観の場合とは異なる独自の組みかえがあったと考えられるが、『円覚大疏』より『禪源諸詮集都序』『原人論』に至る教判の内容が明示されるとともに、宗密自身の教判に対する考え方の深まりについて解説されている。とくに宗密が『円覚經』を『華嚴經』との関係においてどう位置づけたのか、また『禪源諸詮集都序』の禪と教との対配を称して従来は教禪一致説というがそのような表現が宗密の真意に当たるものであるか否かといった点などが検討される(第一節)。次に、本来成仏論についての著者の所論が展開する。『円覚經』の中に「本来成仏」の一句がどのような流れの中で出てくるかを確認したうえで、宗密がこの「本来成仏」をどのように註釈しているのかが詳述されている。『円覚大疏』において、宗密は成仏説を(1)一生成仏(2)三祇成仏(3)相尽成仏(4)初住成仏(5)一念成仏(6)本来成仏の六種成仏説として出す。六種の中の(5)一念成仏は禪宗の成仏論に相当するという。(6)本来成仏について宗密は二論と一經と一註釈を引用する。これらの引用の中でも『八十卷華嚴經』の「普一切衆生成正覺」の一文と、それに対する澄観の『華嚴經疏』の註釈の引用が重要であると指摘する。著者は、宗密の『円覚大疏』の中にこの引用があることによっていわゆる華嚴禪が成立したと考えるのである。『華嚴經疏』のその引用文は、事事

無礙法界の成仏論である「旧来成仏」の箇所と同一なのである。前章においても示されたように、澄観は「教」の立場から『華嚴經』の精髓を性起として把握し、それを成仏論においても論証してみせた。それに対して宗密はそれをそのまま引用したが、しかし彼は宗としての「逐機頓」の場で受けとめた。澄観に至るまで成就してきた成仏論を『円覚經』の本来成仏を場にして受けとめ、単に化儀頓のように仏の法界の事実として受け入れるのではなく、逐機頓として衆生の自覚の根拠として把握したのである。華嚴の教理の一切を逐機頓の禅の立場で受けとめたものを華嚴禅と呼ぶのであると位置づける。内容は華嚴でありながら、その活用は一切禅宗のやり方で一貫させる、そこに宗密の立場があることが明らかにされる(第二節)。次は、本来成仏論がどのように宗密の教学の中で活用されているかという問題である。『円覚大疏』の玄談の考察に始まり『禅源諸詮集都序』を詳細に検討する中で、この問題は把握されることになる。まず、『円覚大疏』の玄談の第四分齊幽深において、宗密は『円覚經』の義理を示すために、主として『起信論』の一心・二門・二覚・三細・六塵の教理に拠っている。しかも、覚不覚の二覚の中の覚の義の箇處で本来成仏が説かれているのである。根本は一心であり、一真法界であり、円覚妙心であるが、現実には不覚から覚へという自覚の中で本来成仏を把握するのである。著者の指摘によれば、その意味で、たとえ本来成仏という表現をとらなくとも一心・二門・二覚すなわち五重本末の第一重から第三重までに所屬する言葉にはすべて本来成仏論が

付随しているという。宗密の禅風を代表する頓悟漸修は第三重の本覚に根拠するものであり、その本源が第一重の一心であり、この本源としての一心が『禅源諸詮集都序』では「禅源」と称されている。この『都序』の内容は五八項よりなるが、著者はこれを大きく三つに分類して、(1)禅經一致を主として説いている段(2)宗教一体を示している段(3)頓漸悟修について宗密独自の立場を示している段、とみなしたうえで『都序』の所説の内容を検討するのである。『都序』の三段を一貫するものが禅源としての真性であり、本覚真性といわれるものは本来成仏の頓悟であることが明らかにされている(第三節)。裴休の質問に答える形でとくに洪州宗と荷沢宗の差異を明らかにしようという意図のもとに著された書物に『裴休拾遺問』がある。この著作にみられる荷沢宗の主張を明らかにするとともに、宗密が説く本来成仏が禅宗の即心是仏とどのように異なるのかが示されている(第四節)。また儒教や道教の人間観に対し、仏教のそれを原ねるという『原人論』も著されたが、その内容を考察することによって所説の内容にみられる中心的な基調は本来成仏論であることを明らかにしている(第五節)。

最後の第六章「華嚴禅の系譜」では、前章で論ぜられた宗密の華嚴禅をうけて、それ以後の中国における華嚴禅につながる人々の系譜が検討される。この系譜に直接的につながる人としては、宗密の弟子である裴休、北宋時代の子璩、淨源、そして賢首宗の学修者と清代の統法などをあげることができる。また華嚴禅の系譜に入れるか否かについてさらに検討を要する人も

あることを指摘する。著者は、華嚴禪の系譜を考察する中で、再度、華嚴禪ということの意味を説明する。法蔵から宗密を経由した華嚴の理解を「華嚴禪」と認定したのであって、法蔵から宗密を経由しない華嚴の系譜も多いことを忘れてはならないというのである。さらに、今後、中国では延寿、高麗では知訥、日本では明恵の教学が、この華嚴禪の「本来成仏論」の視点から改めて検討しなおさなければならぬとするのである。

なお、本書の通読をする中で、本文や引用文の箇所にも、誤字・誤植および脱字とみなすべきものがいくつかあったが、本書の論旨を妨げるほどのものではないのでその一について省略した。

（昭和六〇年三月、大東出版社、A5版、viii+三三八頁、索引一二頁、英文目次・要旨一五頁）

### 「佛教学セミナー」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は、仏教学会又は文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します（一冊のみの場合、送料50円）。

1～12, 14, 22, 23号品切れ	20 号	品切れ(特集号) *
13 号	21, 24号	600円
15～17号	25～31号	700円
18～19号	32～38号	800円
	39～41号	1000円

\* 第20号は特集号につき、別に単行本として文栄堂書店より刊行（品切れ）。

※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。

13, 24号は残部僅少です。